
 <<原著>>

10ヶ月児の母親の育児困難感： 夫の支援，母親の心理特性，及び乳児の気質との関係について

草薙恵美子* 近藤清美 中野 茂

Difficulties in Parenting Experienced by Mothers with Ten-Month-Olds : Their relations to husband support, maternal psychological characteristics, and infant temperament

Emiko KUSANAGI* Kiyomi KONDO Shigeru NAKANO

Abstract : The present study explored factors influencing the maternal difficulties in parenting from various aspects, and examined the concrete contents of mothers' consultation about childcare. Assessment by questionnaire was conducted at 3 and 10 months for infant temperament ; at 1 month before and after delivery for maternal temperament ; 1 month after delivery for maternal depression ; and 10 months for maternal anxiety, parenting difficulties, husband support and husband's psychosomatic problems. Multiple regression analysis indicated direct associations of maternal parenting difficulties with maternal anxiety and husband support, and an indirect effect of maternal negative affect on parenting difficulties via maternal postnatal depression and anxiety at 10 months. Infant temperament had no direct association with parenting difficulties. From a review of the content of maternal consultations, about half of mothers had various problems with childcare. The significance of husband's social support are discussed.

Key words : 育児困難 (parenting difficulties), 乳児の気質 (infant temperament), 母親の気質 (maternal temperament), 母親の鬱 (maternal depression), 夫の支援 (husband support)

問 題

深刻な少子化現象に悩む日本では，母親の育児不安が社会的問題となっている。育児不安による少子化現象のさらなる加速と，虐待等（大原，2002；本間，2001）による子どもの発達への悪影響が懸念されるからである。それを反映してか，近年育児不安に関するわが国の研究は激増している。例えば，国立情報学研究所のサイニイ (CiNii) でタイトルに「育児不安」を含む著作を検索すると，2010年2月現在で，778件の論文が

ヒットする。その内，1960年代は2件，1970年代は4件であるのに対して，1980年代85件，1990年代171件，2000年代345件と，1980年以降10年ごとに約2倍に急増していることがわかる。

しかし，育児不安は近年の母親に特有の問題なのであろうか。上記の1960年代の二つの著作の一つの中で，育児態度の調査結果として，85%の母親が「時々育児について不安を感じる」と回答していることが述べられており（梁井，1966），またもう一つでは，育児不安の原因として，昭和30年代に生じた日本家族の様相変化が引き起こした世代間の断絶が挙げられている（詫摩，1969）。即ち，育児不安を感じている母親は少なくとも40

* 國學院大學北海道短期大学部幼児・児童教育学科

年以上前からかなりの割合で存在し、なおかつ育児不安の増加は予見されていたのである。また訛摩は、育児不安という現象は日本の特別な事情（子どもへの過剰な期待、母子の密着、不安解消の相談相手の乏しさ、学歴偏重社会、女性の人間的未熟さ）が原因となっているのではないかと推測し、そのため他国では育児不安ということが殆ど聞かれなると指摘している。このことは現在でもあてはまり、諸外国では育児不安についての研究論文が今でも極めて少ない。その代わり、諸外国の研究で多いのは、育児自己効力感（parenting self-efficacy）についての研究である（Cutrona & Troutman, 1986 ; Porter & Hsu, 2003）。Holloway（2005）の指摘に見られるように、日本の母親は先進諸国の中でもとりわけ育児不安を感じやすい国民であるのかもしれない。

これまでの日本の育児不安研究の中で多いのは、社会的支援の乏しさや子どもの気質的難しさが育児不安に影響を与えているというものである（Arimoto & Murashima, 2007 ; 荒牧・田村, 2003 ; 渡辺・石井, 2005 ; 武井・寺崎・門田, 2006）。例えば、Arimotoら（2007）の結果によると、子育て不安の高い母親は鬱傾向が高く、夫や社会からの支援が少ない。また、武井ら（2007）は育児不安や育児感情には子どもの気質的な否定的感情反応が影響を及ぼすという結果を得ている。しかし、日本における育児不安を抱える母親の多さを考えると、母親の鬱傾向、社会的支援の乏しさ、子どもの気質的難しさ以外にも影響要因がある可能性がある。従って、本研究では、育児不安の本態をなすといわれる母親の育児困難感を測定し、それへの影響要因を、母親の性格や心理的健康、夫や家族の社会的支援、子どもの気質、夫の心身不調を含め、多面的に探ることとする。これが本研究の第一目的である。母親の人格としては、その中核をなすといわれる気質を、心理的健康測定としては鬱傾向や不安を複数時点で測定する。これまでに人格や性格に着目して育児不安との関連性を見出した研究はあるが、そこでは母親の性格以外の関連要因が検討されて

いないため、母親の性格の影響力とその他の、例えば、従来影響力があるといわれている社会的支援や子どもの気質的要因の影響力との比較がなされていない（中西, 1996）。また、渡辺ら（2005）は社会的支援や育児ストレス以外に母親の心理的特性として自己効力感を取り上げてはいるが、他の母親の心理的特性には目が向けられていない。

第三の目的は、育児困難感を抱える母親は実際に育児について相談したい事柄を有するのか、もしあるとするとそれはどのような事柄かについて、育児についての相談内容の分類および分析を行うことである。また、育児の相談の有無、および内容に子どもの要因、母親の要因、社会的支援等はどのような関連性があるのかも併せて検討することとする。

方 法

1. 参加者

財団法人母子衛生研究会の主催する妊婦教室の参加者等に本プロジェクトへの参加を呼びかけ、妊婦58名（22歳～42歳、平均年齢30.8歳）の同意を得た。妊婦の中に重い医学的問題を有するものはおらず、また生まれた子どもに深刻な先天的障害および誕生時の合併症等を有するものはいなかった。なお、本研究は縦断研究であり、生後10ヶ月以降にもデータの収集は継続しているが、本研究で使用したのは生後10ヶ月までのものである。

全ての質問紙は家庭訪問時に母親に手渡し、次の家庭訪問時に研究補助員が回収した。産前1ヶ月時58名、産後1ヶ月時57名、3ヶ月時55名（男児28名、女児27名、平均月齢2.9ヶ月）、10ヶ月時51名（男児25名、女児26名、平均月齢10.7ヶ月）の質問紙が回収された。

2. 質問紙調査

母親気質測定で用いた質問紙は、Rothbartらの作成した気質質問紙短縮版（Adult Temperament Questionnaire short form : ATQ short form）（Rothbart, Ahadi, & Evans, 2000）を我々が日本語に翻

訳したものである。本質問紙ATQ短縮版は77項目から構成され、回答者は各項目について1「全く当てはまらない」から7「全くその通り」の7段階尺度で回答する。本質問紙で測定される尺度は以下の13尺度、及び4つの因子尺度である:「恐れ」,「悲しさ」,「不快」,「欲求不満」(以上の尺度の全項目から「否定的感情」因子尺度合成),「抑制的制御」,「賦活的制御」,「注意の制御」(以上の尺度の全項目から「エフォートフル・コントロール」因子尺度合成),「社交性」,「肯定的感情」,「高い刺激への快」(以上の尺度の全項目から「外向性・高潮性」因子尺度合成),「知覚的敏感性」,「感情的知覚敏感性」,「連想的敏感性」(以上の尺度の全項目から「定位敏感性」因子尺度合成)。尺度得点は関連項目の単純平均値であり,4つの因子尺度の合成得点は、関連する尺度の全項目の単純平均値である。ATQによる評定は産前1ヶ月と産後1ヶ月時の2度行ったが、母親の気質は産前産後にかけて安定していることが判明したため、その平均値を分析では使用した。なお、尺度数が多く、結果が煩雑となるのを避けるため、分析では因子尺度のみを使用した。4つのATQ因子尺度の信頼性係数(α)は、産前は.64~.82,産後は.63~.85であった。

母親の鬱傾向測定のために使用したのは、日本語版SDS (Self-Rating Depression Scale) (Zung, 1965)である。SDSは20項目から構成され、もとは4段階尺度であるが、ATQ短縮版質問紙の中に組み入れるため、ATQに合わせて7段階尺度に改変し、その平均値を鬱尺度得点として使用した。鬱は産後1ヶ月時に測定したが、信頼性係数は.86であった。

母親の育児不安、不安や鬱傾向、夫や家族の社会的支援の測定のために、子ども総研式育児支援質問紙(0~11ヶ月児用)を使用した(日本子ども家庭総合研究所・愛育相談所編著, 2003)。本質問紙では育児不安の本態をなすといわれる育児困難感(以下「育児困難感」と略す)、夫・家族の社会的支援を測る「夫・父親・家庭機能の問題」(以下「家庭機能問題」と略す)、「母親の不安・

抑うつ傾向(以下「母親不安」と略す)、「夫の心身不調」,「Difficult Baby」尺度についての測定ができる。育児支援質問紙による調査は生後10ヶ月時に実施した。なお、本質問紙尺度の基本統計量は表1に示す。

乳児の気質測定では、母親と同様Rothbartの気質理論に基づく乳児用の気質質問紙Infant Behavior Questionnaire-Revised (IBQ-R) (Gartstein & Rothbart, 2003)を使用し、母親による評定を生後3ヶ月、10ヶ月の時に実施した。本質問紙では14の尺度について測定できるが、ATQと同様に結果の煩雑さを避けるため、分析では因子尺度のみを用いることとした。なお、因子分析は各月齢ごとに実施し、全月齢を通して同一の尺度から因子が構成されるようにした。「高潮性・外向性」因子尺度は「活動性のレベル」,「期待して接近する」,「声による反応性」,「高い刺激を好む」の4つの尺度,「否定的感情」因子尺度は「制限時の負の情動表出」,「恐れ」,「悲しみ」,「不機嫌からの回復しやすさ」,「なだめやすさ」の5つの尺度,「定位・調整」因子尺度は「微笑みと笑い」,「知覚的敏感性」,「注意の持続」,「穏やかな刺激を好む」,「接触を好む」の5つの尺度値のそれぞれ平均値である。それぞれの時期の因子尺度の信頼性係数は、3ヶ月時は.61~.67,10ヶ月時は.63~.69,16ヶ月時は.69~.69であった。

結 果

1. 育児支援質問紙尺度間の関連

乳児が生後10ヶ月時の「家庭機能問題」,「Difficult Baby」尺度得点分布に偏りが見られるため、家庭質問紙尺度間の相関はスピアマンの順位相関分析により求めた(表1)。「育児困難感」,「家庭機能問題」,「母親不安」,「Difficult Baby」の間に正の有意な相関関係が見られた。なお、「夫の心身不調」は上記のいかなる尺度とも有意な関連性が認められなかった。

2. 育児支援質問紙尺度と母親の気質因子尺度との相関

表1 育児支援質問紙尺度の基本統計量と内部相関 (Spearman)

尺度	M	SD	Alpha	1	2	3	4
1. 育児困難感	2.19	.63	.88	—			
2. 家庭機能問題	1.58	.60	.96	.56***	—		
3. 母親の不安	2.05	.73	.92	.65***	.49***	—	
4. Difficult Baby	1.55	.64	.89	.36*	.34*	.29*	—
5. 夫の心身不調	2.15	.80	.90	.06	.07	-.01	.05

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表2 育児支援質問紙尺度と母親及び乳児の気質との相関 (Spearman)

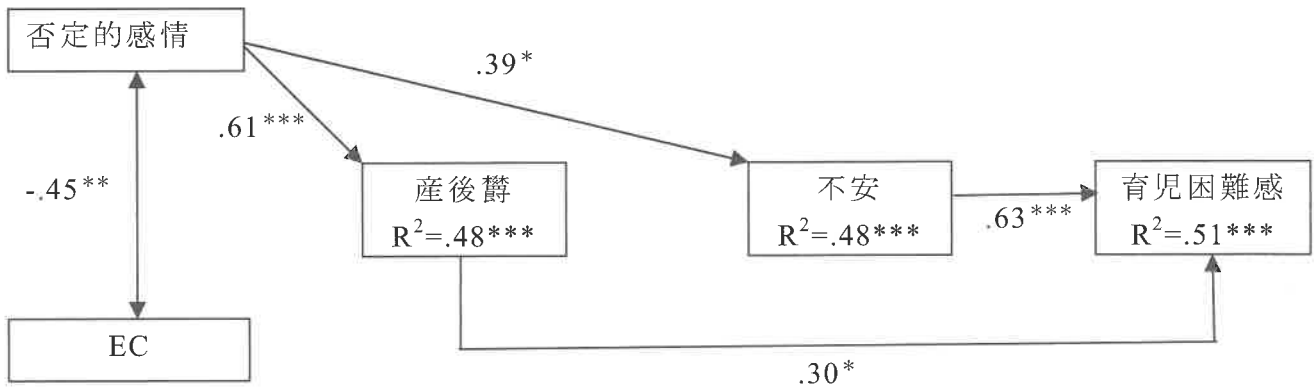
尺度	育児困難感	家庭機能問題	母親の不安	Difficult Baby	夫の心身不調
母親: ATQ尺度					
否定的感情	.41**	.24	.65***	.26	-.08
エフォートフル・コントロール	-.35**	-.23	-.39**	-.13	.06
外向性・高潮性	-.19	-.26	-.34*	.01	-.22
定位敏感性	-.08	.03	-.02	.05	-.05
母親の産後鬱	.57***	.34*	.62***	.47**	-.19
乳児IBQ-R					
3ヶ月: 高潮性・外向性	.05	.12	.18	.01	.05
否定的感情	.20	.06	.22	.21	.43**
定位・調整	-.22	-.13	-.12	-.30*	-.05
10ヶ月: 高潮性・外向性	-.11	-.10	.12	-.04	-.01
否定的感情	.10	.02	.21	.15	.47**
定位・調整	-.37**	-.32*	-.25	-.05	-.22

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表3 10ヶ月児の母親の育児困難感に対する階層的回帰分析

変数	モデル1			モデル2		
	B	SEB	β	B	SEB	β
10ヶ月時母親の不安	.45	.10	.52***	.45	.10	.52***
10ヶ月時家庭機能問題	-.93	.35	-.31*	-.90	.37	-.30*
母親の不安×家庭機能問題				-.19	.51	-.04
R^2		.54			.54	
F for change in R^2		27.73***			.13	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$



注) 有意な値を示すパスのみ表示した。EC：エフォートフル・コントロール
 * $p < .06$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

図1 母親の気質、鬱、育児困難感のパス解析

子どもが生後10ヶ月の時に測定した母親の育児困難感、母親の産前産後の「否定的感情」因子及び産後1ヶ月時の鬱傾向と正の有意な相関、母親の「エフォートフル・コントロール」因子と負の有意な相関を示した(表2)。「家庭機能問題」は母親の産後鬱傾向とのみ正の有意な相関を示した。10ヶ月児の「母親不安」は母親の「否定的感情」、産後鬱傾向と正の高い相関、「エフォートフル・コントロール」及び「外向性・高潮性」因子尺度と負の有意な相関を示した。また、「Difficult Baby」尺度と母親の産後鬱傾向との間にも有意な関連性が見られた。なお、「夫の心身不調」は母親のいかなる気質尺度および鬱傾向とも有意な関係を示さなかった。

3. 育児支援質問紙尺度と子どもの気質因子尺度との相関

3ヶ月時の子どもの気質因子尺度の中で、育児支援質問紙尺度との間で有意な相関を示したのは「定位・調整」因子尺度で、「Difficult Baby」との間に負の有意な相関が見られた。また「否定的感情」は「夫の心身不調」との間に正の有意な相関値を示した。10ヶ月時の子どもの気質因子尺度の中では「定位・調整」因子尺度と「育児困難感」および「家庭機能問題」との間に有意な負の相関関係があった。また、3ヶ月時と同様に、「否定的感情」と「夫の心身不調」との間に有意な正の相関関係が見られた。なお、3ヶ月および10ヶ月の両時点において乳児の「否定的感情」と「育児困難感」の間には有意な相関関係はなかった。

4. 育児困難感の予測

「家庭機能問題」および「Difficult Baby」尺度得点分布は正規分布ではないため、これら尺度の変換を行った。「家庭機能問題」尺度は逆数に変換し、「Difficult Baby」尺度は中央値により分割して「Difficult Baby」ダミー変数を作り、以後の分析ではこれらの変数を使用した。

「育児困難感」と有意な相関値を示す変数が多いために、まず母親の心理的変数の中で「育児困難感」と有意な相関値を示す変数を独立変数として、「育児困難感」への直接、および間接的影響を重回帰分析によるパス解析により検討した。なお、「母親不安」と「育児困難感」は同時期に測定したが、母親の一般的な不安傾向が「育児困難感」に影響すると仮定し、パスはその方向にひいた。有意な標準偏回帰係数を示したパスのみを記したのが図1である。母親の「否定的感情」は産後鬱と10ヶ月時の「母親不安」に影響しているが、「育児困難感」に直接的効果はなかった。また、母親の「エフォートフル・コントロール」は母親の「否定的感情」以外の変数と有意な関係が見られなかった。そのため、これらの変数は今後の分析から除外した。産後鬱と10ヶ月時の「母親不安」は「育児困難感」に直接的影響を有していた。

次に行った「育児困難感」を従属変数とした重回帰分析でも、独立変数としては「育児困難感」と有意な相関を示す変数のみ、即ち、母親産後鬱、10ヶ月の「母親不安」、10ヶ月乳児の「定位

表 4 相談内容の分類

相談内容	%	具体例
<u>子どもについて</u>		
気質・性格・社会性	47.1	・性格がわがまま
身体・疾患	21.1	・強い卵アレルギーがある
生活習慣	15.8	・食事がムラ食い
<u>母親について</u>		
子どものしつけ・かかわり方	73.7	・親として毅然とした態度をとるべきかどうか ・かみついてくるようになって、どうしたらいいかわからない…。
子どもへの関わり以外の自分の行動	5.3	・気分のコントロールが出来なくて急に不安になる
仕事との両立	10.5	・仕事に復帰して子どものことをちゃんと見れるかどうか不安だ
<u>その他 (子ども・母親以外)</u>		
家庭・家族	5.3	・実家が遠いので不便を感じる
社会制度・環境	15.8	・もっと行政のほうで援助があればいい

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

・調整」因子, 「Difficult Baby」, 「家庭機能問題」のみを選択し, ステップワイズ法で重回帰分析を行った。その結果, 有意なモデルが得られ ($F(2, 45) = 24.59$, $p < .001$), 分散の50.1%が説明された。母親の「育児困難感」を有意に関連したのは「母親不安」と「家庭機能問題」であり, 母親の産後鬱, 乳児の「定位・調整」因子, 「Difficult Baby」尺度はモデルには含まれなかった。次に, 「母親不安」と「家庭機能問題」の交互作用を吟味するため, 各変数をセンタリグし, 階層的重回帰分析によりステップ1で「母親不安」と「家庭機能問題」を投入し, ステップ2でその交互作用項を投入した。結果, これらの変数間に有意な交互作用効果は認められなかった (表4)。

5. 相談内容の分析

「お子さんについて困っていることや心配なこと, 相談したいことがあればお書きください」という欄に記載された母親の相談の内容分析をおこなった。37.3%の母親が何らかの相談事項を記述欄に記入しており, その内容を子どもに関すること, 母親自身に関すること, 子どもと母親以外に関すること, の3つに分類した (表5)。一番多いのは子どもへのしつけや行動への対処の仕方

に関するものであり (73.7%), また相談内容の約半数は子どもの気質的行動や社会性についてであった。

子ども育児支援質問紙では相談を必要とする母親をスクリーニングする基準が設けられ, 領域ごとにその合計得点によってランク1からランク5までに分類し, 「育児困難感」でランク5以上, 全領域がランク4以上のものと合わせ, 約10%が相談対象となるように設定されている。本研究ではその基準に合致する該当者は6名であった。そこで本質問紙の基準にのっとり, 相談が必要なケースとそうでないものとの間で実際に相談記入欄への記入の有無に関しての違いがあるかどうかをフィッシャーの直接法により検定したが, 有意な結果は得られなかった ($p = .13$)。

次に, 相談事項を記入している母親とそうでない母親との間で「育児困難感」, 「家庭機能問題」, 「母親不安」, 母親の気質因子尺度に関する違いがあるかどうかを一元配置分散分析により検討した。なお, 「Difficult Baby」についてはダミー変数と相談事項記入の有無を χ^2 検定により関連性を検討した。その結果, 「育児困難感」のみについて有意な傾向が見られ, 相談事項を記入している母親の方が「育児困難感」の得点がやや高い

傾向が見られた ($F(1,49) = 3.43, p = .07$). また, 子どものしつけ・対応についての相談の有無が子どもの気質的特徴と関連することが想定されるため, 関連性を一元配置の分散分析により検討した. 結果, しつけ・対応についての相談の有無と子どもの3つの気質因子尺度との間に有意な関連性は認められなかった.

考 察

本研究では, 第一に, 母親の「育児困難感」と有意に関連するのは, 夫や家族の社会的支援と母親の不安傾向であるという結果が得られた. これまでの報告では子どもの気質的難しさの育児不安や育児ストレスに対する影響が指摘されており (Honjo et al., 1998; 水野, 1998; 武井・寺崎・門田, 2006), また本研究でも乳児の気質的難しさと「育児困難感」との間に有意な相関関係が示された. しかし, 乳児の気質的難しさの影響は夫や家族の社会的支援や母親の不安・鬱傾向ほどの影響力は育児困難感に対して持っていないということが判明した. また, 乳児の気質の1つである「定位・調整」も「育児困難感」と有意な負の相関値を示しながら, 夫や家族の社会的支援や母親の不安・鬱傾向を統制すると, 有意な説明力は持たなかった. さらに, 従来の研究で報告されている乳児の否定的情動が育児不安に関連するということ (武井・寺崎・門田, 2006) に関しても, それを支持する結果は本研究では得られなかった.

夫や家族の社会的支援は母親の育児困難感にどのようにして影響を及ぼすのであろうか. この可能性を考えるとときに有効となる育児モデルがBelsky (Belsky, 1984) により提案されている. 彼によると, 社会的支援には3つの機能がある. 愛情や受容などの情動的支援機能, アドバイスや子どもの世話や家事援助などの道具的支援機能, 行動指針となる社会的期待を提供する機能である. 育児行動についてのアドバイスを家族から受けることは直接的に育児に対する心理的不安解消につながると予測される. また, 夫や家族の情動的支援によ

り母親の気持ちが満たされ, 家事援助を受けることで心理的余裕が生まれ, 結果的に母親の育児困難感が低減するのかもしれない. 実際, 社会的支援は直接育児不安の軽減につながると同時に, 育児肯定感のようなポジティブな側面にも働き, 間接的にネガティブな感情を低めることに役立つということがいわれている (荒牧・田村, 2003; 荒牧・無藤, 2008). また, 社会的支援が自己効力感に影響すること (Teti & Gelfand, 1991) や, 母親の満足感などに影響を与えることがこれまでも見出されている (Crnic, Greenberg, Ragozin, Robinson, & Basham, 1983).

次に, 母親の気質的特徴の中で, 「否定的感情」や「エフォートフル・コントロール」は育児困難感と有意な相関関係を示したが, その関係性は我々が当初予測していた育児困難感に母親の気質的特徴が「直接」関係しているというよりも, 母親の否定的感情が産後鬱への影響や10ヶ月時の不安への影響を介して「間接的」に育児困難感に影響を与えているというものであった. このことは, 育児困難感を抱えやすい生来の母親の気質的特性に配慮して育児支援をおこなう必要性があることを示唆しているといえよう. また, 母親の鬱傾向は母子の様々な様相に影響を与えることがこれまでも見出されているが, 本研究でも, 産後の母親の鬱傾向はその9ヶ月後の母親の育児困難感, 家族の社会的支援, 母親の不安傾向, 乳児の気質的難しさ知覚などに関連することが明らかとなった. この結果と, 家族の社会的支援変数を含まないモデルでは, 産後の鬱傾向が育児困難感に直接影響しているという結果とを合わせて考えると, 母親の産後鬱へのケアの重要性が改めて確認されたといえる.

「夫の心身不調」に関しては, 「母親不安」との間 (小林 et al., 2006) や「育児困難感」との間 (川井・庄司, 1999) に有意な関係のあることが報告されているが, 本研究ではどの母親変数との間にも有意な関連は見出されなかった. しかし, 「夫の心身不調」は, 乳児の3ヶ月および10ヶ月の「否定的感情」との間に有意な正の関係を

示した。この結果は大変興味深いと思われる。というのも、この関係性の一つの可能性として、乳児の「否定的感情」と「父親の心身不調」との間の遺伝的繋がりが考えられるからである。しかし、一方で、母親の認知的偏りが影響している、つまり他者の否定的情動や行動をより強く知覚する傾向が、この関連性の背景にあることも想定される。これに関しては今後の検討課題といえよう。

育児質問紙に記載された相談事項の内容分析からは、育児におけるほんの些細なことについても悩んでいる母親の姿が浮かび上がった。また、育児困難感を抱える母親は相談する可能性が高いことも確認された。しかし、育児支援質問紙の結果から相談が必要と判定されたケースが必ずしも困ったことや心配なことがあると相談をしていくわけではないということも判明した。このことから、自分から相談してこないケースにもリスクのある母親がいることを十分に念頭に入れて育児相談業務を行う必要があるといえよう。

最後に今後の課題について述べる。第一に、本研究で用いた質問紙の夫や家族の支援についての質問項目では「子育ての大変さなど私の苦勞をわかっていない」や「家庭内に関する事柄について夫には期待できない」など、どちらかというとな全体的な印象に基づいた判断を母親に求めている。しかし、夫に具体的にアドバイスするには、妻がどのような状況でどのような夫の行動に対して「苦勞をわかっていない」と感じるのか、より具体的な内容に踏み込んだ研究が求められるであろう。というのも、夫に対してアドバイスをする際にはそのような具体的知見が役立つと思われるからである。第二に、育児困難感の低減に夫の社会的支援が有効であることが見出されたが、その影響過程について行動観察データを含め、その影響プロセスについての詳細な検討が必要であろう。本研究結果は母親の報告によるデータのみに基づいているため、先に述べた様にそこに母親の認知的バイアスが介入している可能性が考えられるからである。また、夫や家族の社会的支援の高低の

違いに、夫のどのような行動がどのように対応しているのか、実際に吟味することも可能となる。第三に、本研究では同時期に測定した「母親不安」と「育児困難感」の間の影響を「母親不安」が「育児困難感」に影響すると仮定して分析を行った。しかし、研究によっては影響の方向を逆に想定し、例えば、育児自己効力感から鬱への影響を実証している研究もある (Cutrona & Troutman, 1986; Weaver, Shaw, Dishion, & Wilson, 2008)。よって、母親の不安傾向と育児困難感の測定を二時点以上で行い、その影響の方向性についてより詳しい検討を行うことが望まれる。また、母親の情緒応答性などと育児困難感との関連は子どもの年齢により異なることが示されている (小原, 2005) ため、他の時点で母親の育児困難感を測定した場合に、本研究では見られなかった母親の気質の特徴と育児困難感との関連性が生じてくることも考えられる。第四に、本研究では質問紙調査のデータのみを対象としたが、サンプル数の少なさのために用いられる統計的手法に限界があった。今後はより多量のサンプルで追試を行い、得られた結果を再確認する必要がある。

引用文献

- 荒牧美佐子・田村毅.(2003). 育児不安・育児肯定感と関連のあるソーシャル・サポートの規定要因：幼稚園児を持つ母親の場合. 東京学芸大学紀要. 第6部門, 技術・家政・環境教育, 55, 83-93.
- 荒牧美佐子・無藤隆.(2008). 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い：未就学児を持つ母親を対象に. 発達心理学研究, 19 (2), 87-97.
- Arimoto, A., & Murashima, S. (2007). Child-rearing anxiety and its correlates among Japanese mothers screened at 18-Month infant health check-ups. *Public Health Nursing*, 24(2), 101-110.
- Crnic, K. A., Greenberg, M. T., Ragozin, A. S., Robinson, N. M., & Basham, R. B. (1983). Effects

- of stress and social support on mothers and premature and full-term infants. *Child Development*, 54(1), 209-217.
- Cutrona, C. E., & Troutman, B. R. (1986). Social support, infant temperament, and parenting self-efficacy : A mediational model of postpartum depression. *Child Development*, 57(6), 1507-1518.
- Gartstein, M. A., & Rothbart, M. K. (2003). Studying infant temperament via the Revised Infant Behavior Questionnaire. *Infant Behavior and Development*, 26(1), 64-86.
- Holloway, S., Suzuki, S., Yamamoto, Y., & Behrens, K. (2005). Parenting self-efficacy among Japanese mothers. *Journal of Comparative Family Studies*, 36(1), 61-76.
- Honjo, S., Mizuno, R., Ajiki, M., Suzuki, A., Nagata, M., Goto, Y., et al. (1998). Infant temperament and child-rearing stress : birth order influences. *Early Human Development*, 51(2), 123-135.
- 本間博彰. (2001). 乳幼児期の虐待防止および育児不安の母親の支援を目的とした母子保健に関する研究. 平成12年度厚生科学研究, 97-248.
- 川井尚・庄司順一・千賀悠子. (1999). 育児不安に関する臨床的研究 (6) 子ども総研式・育児支援質問紙 (試案) の臨床的有用性に関する研究. 日本子ども家庭総合研究所紀要, 36, 117-138.
- 小林康江・遠藤俊子・比江島欣慎・雨宮幸枝・長田保昭・田辺勝男・中村雄二. (2006). 1カ月の子どもを育てる母親の育児困難感. 山梨大学看護学会誌, 5 (1), 9-16.
- 水野里恵. (1998). 乳児期の子どもの気質・母親の分離不安と後の育児ストレスとの関連: 第一子を対象にした乳幼児期の縦断研究. 発達心理学研究, 9 (1), 56-65.
- 中西雪夫. (1996). 乳幼児をもつ母親の性格と育児不安. 佐賀大学教育学部研究論文集, 43 (2), 113-119
- 日本子ども家庭総合研究所・愛育相談所編著. (2003). 子ども総研式育児支援質問紙の利用手引き (第2版). 東京: 母子保健事業団.
- 小原倫子. (2005). 母親の情動共感性及び情緒応答性と育児困難感との関連. 発達心理学研究, 16 (1), 92-102.
- 大原美知子. (2002). 育児不安と虐待: 子育ては楽しいですか?. 国際基督教大学学報. I-A, 教育研究, 44, 287-294.
- Rothbart, M. K., Ahadi, S. A., & Evans, D. E. (2000). Temperament and personality : Origins and outcomes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78(1), 122-135.
- 武井祐子・寺崎正治・門田昌子. (2006). 幼児の気質特徴が養育者の育児不安に及ぼす影響. 川崎医療福祉学会誌, 16 (2), 221-227.
- 詫摩武俊. (1969). 核家族における母親の育児不安. 児童心理, 23 (10), 143-148.
- Teti, D. M., & Gelfand, D. M. (1991). Behavioral competence among mothers of infants in the first year : The mediational role of maternal self-efficacy. *Child Development*, 62(5), 918-929.
- 渡辺弥生・石井睦子. (2005). 母親の育児不安に影響を及ぼす要因について. 法政大学文学部紀要, 51, 35-46.
- Weaver, C. M., Shaw, D. S., Dishion, T. J., & Wilson, M. N. (2008). Parenting self-efficacy and problem behavior in children at high risk for early conduct problems : The mediating role of maternal depression. *Infant Behav Dev*, 31(4), 594-605.
- 梁井晃. (1966). 現代における育児不安-夫と妻との対話 (対談). 教育と医学, 14 (12), 31-36.
- Zung, W. W. (1965). A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, 12, 63-70.